

7月4日 年間第14主日

イザ 66:10~14 ガラ 6:14~18 ルカ 10:1-12,17-20

1. ルカ

72人の派遣の物語りは、初代教会における宣教の展開の様子を伝えているように思われます。使徒たちに始まった宣教の業は、間もなくさらに多くの人々によって受け継がれ、進められて行きました。それは使徒たちの宣教の継続であって、使徒たちを派遣されたのと同じ天上のキリストによって、使徒たちと同じ“神の国の福音”を宣べ伝えるものと理解されていました。このような宣教奉仕者に約束されているものはただ一つでありました。「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」(v.20)

教会は早くから、偽預言者や反キリスト(1ヨハ 2:22,4:1)を見分ける判断力を大切にしていました。いわばこの判断基準を提供する典型的な役割を、今朝の福音書の日課は果たしています。彼ら宣教奉仕者の特性の中で、特に鍵となるものは、キリストによって派遣されたということと、神の国の福音を語っているという実績であったことが理解出来ます。

この二つの特性を有効に保持し活用するために、歴史の教会は確かに大いに努めて来ました。地上の教会が真にキリストの教会であるとは、決して自明なことではなくて、絶えざる悔い改めと刷新を要求されることだったからです。

各自が所属している教区の司教が、教会のこの絶えざる悔い改めと刷新を、自らの言葉と行動によって世に現していると、信者会衆が実感し共感しているところでは、教会は生きていると言うことが出来ます。実に全世界のキリスト者のみならず、それを取り囲む異邦人が、神の国の福音の宣教が彼らに届くのを待ち望んで飢えに耐えているのではないのでしょうか。

2. ガラ

v.14 「しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。」

神の国の福音を語ることは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える(1コリ 1:23)ことであります。

v.14 「この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。」

私たちは洗礼の秘跡によって、古い罪の自分がキリストと共に十字架につけられて死に、キリストの死者の中からの復活の命に与って新しい命に生きる者となりました(ロマ 6:3-11)。

使徒パウロがこのガラテヤの信徒への手紙で問いかけた基本的な問いの前に、現代のキリスト者である私たちは再び立たされています。

「あなたがたに一つだけ確かめたい。あなたがたが、“霊”を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも、福音を聞いて信じたからですか。」(3:2)

霊の賜物は人が与えるのではなくて主から来ます。しかし信者が聖霊を受けて新しい命に生きるようになるために、教会はことばとしるし、および秘跡を最大限に活用するよう努めて来ました。

それでは私たちが共にミサをささげるために集うとき、私たちの教会の司祭は十字架の福音を語っているでしょうか。信者たちはこれまで神の国の福音を聞いて来たでしょうか。私たち信者がこの世の友人から「福音って何ですか」と質問されても、これまで殆どしどろもどろでしかなかったのは何故でしょうか。

神の国とも十字架とも関係のない別の福音なら、多くの人が語っています。しかしキリスト者であるならば、十字架につけられたキリストを宣べ伝える(1コリ1:23)はずなのに、私たちはミサでもその他の教会の集会でも、そのように教えられ、そのように訓練されはしませんでした。

あなたは聖霊を受けていますか、あなたはキリストの霊を持っていますか(ロマ8:9)と質問されて、確信が持てずにしどろもどろでしかない信者たちに、“あなたは福音を信じたのだから聖霊を受けているのです”と教えるために、司教と司祭はキリストによって派遣されているのです。教会憲章8の次の言葉は、信徒と教導職の区別なく、21世紀の教会のすべての者の祈りの課題であります。

「自分の心とところに罪人を抱いている教会は、聖であると同時に常に清められるべきものであり、悔い改めと刷新との努力を絶えず続けるのである。」

3. イザ

v.13 「母がその子を慰めるように、わたしはあなたたちを慰める。エルサレムであなたたちは慰めを受ける。」

地上の教会は不完全なものであって、いつもその中に罪人を抱いているとはいえ、それにもかかわらず天上の典礼を信者が前もって味わい、これに参加する(典礼憲章8)ことを許された民の共同体です。私たちは地上の教会の典礼によって、天のエルサレムから来る慰めを受けるのです。それは私たちが神の国に復活する終わりの日に完成する慰めの先取りです。私たちは「このような希望によって救われているのです。」(ロマ8:24)

神の国の福音が語られること、聞かれることのための、地上の教会の「悔い改めと刷新との努力」は、等くすべてのキリスト者の課題なのです。 ハレルヤ、アーメン。

7月11日 年間第15主日

申 30:10～14 コロ 1:15～20 ルカ 10:25～37

1. ルカ

初代教会が異邦人世界に急速に伝播して行ったとき、神の救済史の対象がユダヤ民族という枠を越えて、すべての人々に広がりました。民族や身分や男女の別なく、イエス・キリストを信じるすべての者への救いを約束する福音が、宣教されて行きました。

しかし、全世界に福音が宣べ伝えられるということが直ちに、すべての人がキリストを信じて洗礼を受けるということにはならなかったのは当然でありました。教会の宣教に触れ、聖書を学んでも、それだけではなお足りない、より根源的な事柄があったからです。

v.25 「何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」

永遠の命とは、救われた人々が神の国に復活する命のことで、イエス・キリストが信じる者に与えてくださるものです。キリストに結ばれる洗礼を受けた私たちは、キリストの死にあずかって共に死に、その復活にあずかって新しい命に生きる者となりました。洗礼の秘跡は単なる教会の定めた儀式以上のものです。そしてこれを受ける者にとっては、それは単に要求されている手続きを実行する以上のものなのです。

2. コロ

洗礼の秘跡は、これに与る人をキリストの体の部分(肢体)として、教会に接ぎ木しました。

v.18 「また、御子はその体である教会の頭です。御子は初めの者、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、すべてのことにおいて第一の者となられたのです。」

「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。」(I コリ 12:27)

御子の十字架の血によって贖われ、罪赦されたのは、この教会共同体であって、それは恵みにより、信仰によって実現しました。人は自らの決断によって福音を信じて洗礼を受け、教会共同体の成員となったのであり、さらに自らの意志と決断によってこの恵みの共同体に踏みとどまっているのです。

一方では教会の宣教は全世界に向けられています、それは人々を救われた民の群である教会へと招いているのです。他方、共にミサをささげているキリスト者の群は、今や各々キリストの体の部分として、互いに補い合い結び合わされた神の家族として、キリストの福音を聞いています。

私たちキリスト者にとって、福音は教会やミサから切り離しては理解することが不可能であることを、思い起こさねばなりません。

3. ルカ

v.29 「では、わたしの隣人とはだれですか。」

教会はいわば信仰によって人為的に集まった共同体でありますから、お互いは比較的最近になって隣人となりました。ルカ福音書の背景をなす初代教会、特に異邦人教会では、急速に新しい隣人が加わって来ていましたから、先に信じた人々は後から加わって来る新しい隣人たちを次々と迎えることになりました。

自然的な“隣人である”関係ではなくて、意志と決断によって“隣人になる”人々が洗礼を受けて仲間に入って来るのですから、共同体に以前から属している信者にとっても、これらの新しい仲間を迎え入れることはやはり、意志と決断によって自らも彼らの“隣人になる”ことであった訳です。

以前から“隣人である”ことではなくて、新しく“隣人になる”ことを観点として、今朝の福音書の物語りを讀むと、そこには生き生きとした初代教会の人々の姿が浮かび上がって来ます。神を愛し隣人を愛するとは、一般論としての世俗の徳目ではなくて、キリストの血の代価によって買い取られた私たちへの、共同体を造り上げていくための神のことばであることが理解出来ることでしょう。

私たち一人一人は、“あなたは、兄弟たちの隣人になりましたか？”と、天上のキリストから今朝、問いかけられているのです。このキリストの声が聞こえず、聖書を単なる“良いことの書かれた書物”として利用することしか知らない人は、残念ながら“神の国から遠い”(マコ 12:34)人です。

4. 申

v.14 「御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。」
それは今日も教会に、聖伝と聖書によって伝えられている使徒たちの宣教なのです(ロマ 10:8 参照)。

ハレルヤ、アーメン。

7月18日 年間第16主日

創 18:1～10 コロ 1:24～28 ルカ 10:38～42

1. ルカ

vv.41-42 「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

私たち現代のキリスト者は、ルカ福音書が伝えるこの逸話から、発展途上にあつた初代教会の姿を想像することが出来ます。それはどの教会でも見られる日常的な場面に当てはまる話であつたに違いありません。福音の宣教のために献身して各地の教会を巡回して働く人々を、それぞれの教会が迎えてもてなすことは、当時キリスト教の徳の一つと考えられていたようです。

一つの集団が組織を維持し、その活動を運営するためには、多くの奉仕者たちの手を必要とします。しかし教会について言えば、そこで何よりも大切なものは父と子と聖霊の交わりが一同と共にあることであり、キリストの福音を聞くということです。イベントとして成功することと、一同がキリストの福音を聞くということが、必ずしもうまく両立しない経験を、私たちは知っています。そしてそれは初代教会も経験していたことであります。

私たちの主日のミサは、入祭の歌に続く次のようなあいさつで始まります。

司祭：父と子と聖霊のみ名によって。 会衆：アーメン。

司祭：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんと共に。 会衆：また司祭と共に。

これは、「神に呼び集められて聖霊の交わりのうちに一つになっている中心に、復活された主キリストが共にいてくださることを意識させる」(土屋吉正／ミサがわかる 31頁) ものなのですが、実際には多くの司祭がその後、改めて「お早うございます」という日常的な挨拶を付け加えることによって、ミサを人間中心の集會に変形してしまっているのが実状です。

世の中にはマルタのような人は多く、マリアのような人が少ないのが事実であるとしても、それでもマリアがいる！ことを感謝しましょう。私たちキリスト者にとって、共にミサをささげるために集まることは、そこでキリストの福音を聞くことだからです。感謝の典礼で教会がささげる十字架のいけにえは、ことばの典礼で語られ聞かれるみことばと固く結びついているのです。

2. コロ

使徒パウロは自分を説明して次のように語りました。「神は御言葉をあなたがたに余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになり、この務めのために、わたしは教会に仕える者となりました。」(v.25)

私たちはパウロを初めとする使徒たちの伝えた福音の伝承を、聖書を通して聞くことが出来ます。確かに今日、聖書は全世界の多くの言語に翻訳されて、誰でも簡単に読むことが出来ます。そして事実キリスト教の一部の教派の人々の間では、非常に熱心に読まれて来ました。同様に聖伝は、古代教会の信条や公会

議の文書、またその伝承を受け継いでいる現代の典礼書や各種儀式書などによって、今日まで伝えられて来ています。しかし現代のキリスト教は、使徒たちの証言によって明らかにされた「世の初めから代々にわたって隠されていた秘められた計画」(v.26) を殆ど全く知りません。多くの信者たちが「その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です」(v.27) という使徒パウロのメッセージを理解出来ないのです。

第二バチカン公会議は、「聖伝と聖書とは教会に託された神のことばの一つの聖なる委託物」であると述べ、さらに「教導職は神のことばの上にあるものではなく、むしろ、これに奉仕し……」と宣言しました(神の啓示に関する教義憲章 10)。このことを 21 世紀の教会は再確認しなければなりません。近代の通俗的キリスト教は、福音に代えてドグマを語り、宣教に代えて道徳と処世術を教えて来ました。そして西欧のキリスト教世界を育てたのであります。しかし 20 世紀末になってついに自立し始めた世俗世界は、在来の通俗的キリスト教という支柱を必要としなくなりました。このことが西欧世界におけるキリスト教会の急速な凋落の根本原因であります。

神のみことばは聖伝と聖書を通して今日まで確かに伝えられて来ています。しかし伝えられ語られていることと、それが聞かれて力を発揮することとは別のことです。キリストが「御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた」(ヘブ 9:12) ことと、人々が信じて救われるという出来事との間を橋渡しするものが要だということです。使徒パウロが語ったのは正にそのことであります。「今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています。」(v.24) 21 世紀の教導職が、この使徒の労苦を受け継ぐことが出来るよう、私たちは祈りたいと思います。

3. 創

「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください」(v.3) というアブラハムの言葉は、イスラエルの信仰に深く根ざした神学的な意味合いをもって、この物語りの中に置かれています。以前の口語訳では、原典のヘブライ語を直訳して「わが主よ、もしわたしがあなたの前に恵みを得ているなら」となっていました。相手の好意(恵み)に無条件に身を委ねるという姿勢が、この重大な神の約束の告知の物語りの出発点になっていることに注目する必要があります。

単なる外交辞令ではなくて、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたキリストの前に立つ一人の罪人として、私たちも「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください」と言う信仰の姿勢が、21 世紀の教会の出発点となりますように。 ハレルヤ、アーメン。

7月25日 年間第17主日

創 18:20～32 コロ 2:12～14 ルカ 11:1～13

1. 創

神がアブラムに新しい名アブラハムを与え、彼を約束を受け継ぐ民の父とされた日から、彼の神に対する関係が変化しました。すでに老人となっていたアブラハムとサラの間に子供が誕生するに至る物語りの経過の中に、アブラハムとロトの対照的な運命の描写が挿入されます。そこでアブラハムは、あたかもかつてアダムがそこから追放されたエデンの園に再び戻ったかのように、神と親しく語り合っています。

祝福の使者としてアブラハムの天幕を訪れた三人の使いは、身を転じて裁きの使者となってゾドムの町へと向かっていました。アブラハムは主の御前に進み出て言います。

v.23-24 「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。あの町に正しい者が五十人いるとしても、それでも滅ぼし、その五十人の正しい者のために、町をお赦しにはならないのですか。」

彼は正義の弁護者として、神と言い争っているのでしょうか。古代イスラエルにも、彼らの父祖たちをそのような伝説の偉人として説明する考え方が存在した痕跡が、ホセア書にあります。「ヤコブは、……力を尽くして神と争った。神の使いと争って勝ち……」(12:4-5)(創 32:23-33 参照)

キリスト教の現代における使命は、世界に対して正義の弁護者として発言することだと考えている人々が多くいて、それが神に向かって教会がささげるべき祈りの課題であると主張されたりします。しかし私たちは今朝の朗読配分から、もう一つのメッセージを聞き取る賢さを持たなければなりません。それは私たちがアブラハムよりも神に向かって目を集中し、耳を傾ける賢さです。

アブラハムはゾドムの町に正しい者がとても五十人もいないことを知っていました。彼は神と問答を繰り返して、ついに正しい者の人数を十人まで引き下げることに成功します。アブラハムは十人ならいると思ったのでしょうか。いや彼は、神の目から見て正しい人は、十人どころか一人もいないことを、すでに心の底では感じていたのかもしれませんが。

神はゾドムを滅ぼされましたが、このように熱心に執り成したアブラハムを御心に留めてくださいました(創 19:29)。アブラハムの弁論が功を奏して、神がご自分の計画を変更されたものではありませんでした。神は彼を選んで多くの国民の父とし、彼が御自分と親しく語ることを喜ばれたのでした。

2. ルカ

v.8 「しかし、言っておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。」

この言葉も先のアブラハムの弁論と共に、人間の熱心な祈りが神の御手(ご計画)を動かす(変更させる)という信念の根拠に利用されて来ました。

教会の歴史の中に繰り返し姿を現す“厳格主義”の中に、聖書の中のいろいろな言葉を生活の中で徹

底的に実行することを要求するものがありました。このような考え方は現代の教会においてもなお力を持っており、信者の実生活との間に多くの深刻な亀裂を生んでいます。

しかし今朝の朗読配分から、私たちは天の父のもう一つのメッセージを聞き取る賢さを持たなければなりません。福音書は、キリストの血によって贖われ罪赦された信者たちに、“求めなさい、探しなさい、門をたたきなさい”と呼びかけています。しかし天の父が良い物を、また聖霊を与えてくださるのは、その豊かな恵みによるのであって、決して人間の祈りの力によるものではありません。

同様に主の祈りの中で、「わたしたちも……皆赦しますから」(v.4)と祈ることを教えてくださったキリストは、そのような決意の繰り返しを私たちに望まれました。しかしそれを自力では決して実現出来ない罪人である私たちのために、「御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです」(ヘブ 19:12)。これらの呼びかけは、キリストの救いを受けるための条件ではなく、またその達成度によって神が御自分の計画の予定を変更されるようなものでもなかったのです。

3. コロ

w.13-14 「神は、わたしたちの一切の罪を赦し、規則によってわたしたちを訴えて不利に陥れていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。」

実に私たちの救いは、恵みにより信仰によるのです。今日、世界のキリスト教は深刻な存続の危機の中にあります。すでに裁きの使者がソドムの町に向かっている中で、アブラハムは神と交渉して何かを獲得したでしょうか。聖書はそんな期待に対しては何の答えも語っていません。

救済史は神の御手にあります。私たちはミサの中で、主の祈りの副文に応答して唱えます。「国と力と栄光は、限りなくあなたのもの。」

「あなたがたは、もしキリストのものだとするなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による(神の国の)相続人です。」(ガラ 3:29)

ハレルヤ、アーメン。